

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第三十章

kid nap & extortion 2

— 誘拐 と 恐喝 2 —

峯村 明



目次

kid nap & extortion-2	
お願い	2
登場人物	3
kid nap & extortion-2	5
witch	12
あとがき	18
奥付	19

kid nap & extortion-2

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年08月14日 記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
イリチャ	真の魂体
A.パウジーニ	桧山健の個人秘書
サーディク	H & L 財団・芸術部門責任者 エドミールのステージネーム
ボディーガードY	サーディクの護衛
ウィンディ・サトウ	H & L 財団・法務部勤務
竜門洑 優美子	

cast30.JPG

kid nap & extortion-2

292.

(健——)

ひろの声にならない声。ひろもまたこの話を知っている。ほかでもないヒューダー自身がマミヤに語って聞かせたのだから。涙で汚れた顔をぬぐうのも忘れて、ひろは呆然と目を宙に据えている。

「あれえ……ふふ……キミたち、まさか知らなかった？ キミたちの愛息が冥界王さまの息子の現身^{うつしみ}だってこと。それとも、そんな尊いお方を引き受ける覚悟もなかったって、そういうことかな？」

ひろの中で、ぎりっと音を立てて、何かが動いた。
「約束したのよあたしたち。家族になるんだって。イリチャが望み、あたしたちも望んだのよ。だから真が生まれた」
「その約束を交わしたとき、オレたちは互いのすべて、過去も出自も、あらゆるすべてを受け入れたんだ。『真』という名前は約束が成就された証しなのだ」

「ねえ」、と死神はため息をつく。
「キミたちの約束がどんなごりっぱなものか、そんなこと、問題じゃあないんだよ。じつのお父上は息子を返してくれとおっしゃってる。お父上はご子息はさらわれたと思っておられる。キミたちのたのしい空想的なお話と、じつのお父上と、どちらの言い分に理があるかな？ 裁判になったらどちらが勝つか、ははっ、お猿にだってわかるってモンでしょ」

「おまえの頭の中にはイリチャの存在がない」健はぴしゃりと切り返した。「彼は意思表示ができない幼児じゃないぞ」

ヒューダーが知るイリチャの最後の姿はミクトランでのもの。

ミクトランの主^{ぬし}テクトリとこの死神の前にある男が現れ、彼らを威圧し、『巨人族をなかったことにする』という異様な力をふるった。そして呆然自失するイリチャを担ぎ上げ、去って行った。

あの男がテクトリや死神の上位、冥界王なのだ。ヒューダーの目には、イリチャはさらわれたようにしか見えなかった。

その後のイリチャを知るのはバイスロイだけであり、今の彼らふたりは健が嫉妬に似た感情を覚えずにいられないほど打ち解けた関係に見えたが、それはこの際、関係ない。

『9かける3番目の王国』の外伝には、王は息子に不遇を謝罪し、和解を求めたとあり、ヒューダーはにわかには信じがたいと思ったものだ。もしこの二名、王と息子が和解していれば、イリチャが冷却の炎と化すような事態にはならなかったはずではないか。

はったりでもなんでもいい、言わずにいられない、そして死神のことを真っ向から否定したい衝動が、体内から健を揺り動かした。

「貴様は知らないだろ。冥界王は息子から拒絶されたんだ」

相手はいっしゅん言葉に詰まった。理由はわからない。反撃を予想していなかったのかもしれない。

「冥界王さまがご子息から？　よくもそんな大それた寝言が言えたもんだ、わかってる？
相手は冥界王さまだよ？　あとでどんなバチが当たっても、知らないからね」

それから早々に話題を変えた。「そうそう」、と。「キミのお友だちも、ワタシが預かったから」

「オレの友だち??」ひろが手をのばしてきて腕をつかんだ。そうだ、真がいらないのに気づく前.....ふたりで話をしていて、誰かの名前が出ていた.....

ペイリー！？　まさかペイリーまで人質に！？　ひろに送られてきた動画は死神の手によるものだったというのか！？

健は必死で自制した。誘導されているのかもしれない。うっかり固有の名前を口にしないように。しかしそのペイリーが匿われている隠れ家へイリチャが急行している——自ら罠に飛び込みに行ったようなものだ——ことを悟られぬように。

「オレの友だちが——どうして貴様の関心をひいたのか、知りたいものだ」乾いて、自分

の声ではないような声。

「それ？ そりゃあ、彼は巨人を掘りだしてしまったからさ。まあ、世の中には珍しいモノを掘りだしまう御仁は星の数ほどいるけど、巨人の痕跡を見つけてそのうえ、キミと接点があるってのはそうはいない」

「オレと接点があったばかりに？ そういうことか！？」

ずっとひろにとり憑いていた、『怒りで目が眩む』という情動が、今度は健に乗り移ってきた。怒りのあまり己を見失う、そんなことが自分に起ころうとは——！

** 293.**

ひろは慄然とした。こんな彼を見たことがなかった。息子に関わることではまだ抑制が効いていた。だが自分のせいでなんの罪もない……それどころか己の魂の導くままに生きようとする……友人にまで死神の手が伸びたと知って——健は顔色を変えて手を震わせている。今にも爆発しそうだ。衝動に任せて爆発したらどうなる？ そうしたら真の命が——

いっしゅん、ひろの頭の中をそんな場面が生々しく通り過ぎた。健が暴発せずに済んだのは玄関ドアを誰かがノックしてくれたおかげだった。

ふたりは、はっと顔を見合わせた。このノックの仕方はパウジーニだ。とっさに、ひろは立ち上がり、健の意向を待たずに玄関へ走った。パウジーニさんに加わってもらおう、と閃いた。健がボディガードXと交わした会話そのままだった。情報を与えられない秘書ではボスを守ることはできない。

パウジーニが入室するのを視界の端にとらえ、健は額の冷たい汗を手の甲でぬぐった。水がほしい。

「オレの役目はなんだ？」

電話機が応答する。

「じつの父と子の対面を実現させること。素晴らしい役目じゃないの。光栄に思いたまえよ。拒否したら？ キミの息子が犠牲になるのかな。冥界王さまの許可もなくできた子

供になんの意味もないし、そもそも許しがたいんだよね」

なんで冥界王の許可がいるのよ！！ とひろが胸中で叫ぶのが聞こえるようだった。まったく同感だったが健は拳を握り締めた。

「——貴様ほど非道なヤツを、オレはみたことがない」

「嬉しいねえ！ それは最高の褒め言葉だ。とくに大好きなキミから贈られた日には、嬉しくて坊やの首を掻き切りたくなっちゃうね、細っこいから手ごたえはなさそうだけどね。ひとりいなくなったところでもうひとりキープしてあるからべつにかまやあしないし」

「貴様～……」

「ま、息子の命が惜しかったらそこで土下座でもして命乞いすることさ。なんたってボクは死を司る神さまだから」

「貴様は神などではない！ ただの外道だ！」

「……ふっ。キミの気持ちは、わかった、よーくわかったよ。とにかく六時間、あげるから彼と話をつけてくれたまえ。六時間経ったらまた連絡する」

待て！！ 息子と代われ！！ と喚く間に電話は切られてしまった。

294.

リビングの入り口にひろとパウジーニが立っている。今の会話を聞いていた二人もまたあ然としている。

二人の表情に疲労感はいや増し、ほとんどうんざりした動きで受話器を電話機に投げるように戻した。

ひろはその場にへたり込み、パウジーニは遠慮がちに歩を運んで、おそろおそろ「ボス……」と声をかけた。「シンくんは、誘拐されたのですね？」

尋ねるパウジーニをちらりと見やり、のろのろとテーブルの上に肘をついて両手の指に額をのせる。ボスのこんな姿は初めてみる、とパウジーニは思った。

「すぐに——！　警察へ——！」

「息子が死神にさらわれた、助けてくれ、と頼むのか？」

健は笑いたくなった。アルチニアとペイリーを追っていたのは警察だった。

「.....それで.....お尋ねしてよろしいですか、誘拐犯の要求はなんなのですか？」

桧山はゆっくりと身を起こしてソファの背もたれに背中を当て、正面をみた。「真の魂」

「.....は」

「真の魂だ、パウジーニ、そんなものを誰かに渡せると思うか？」

「え.....私にはわかりかねますが、しかしボス、シンくんはこの建物の中から連れ出されたのです、それはまちがいありません、ですから.....」

「.....連れ出された.....どうやって？」

「保安カメラにシンちゃんと手をつないだ女が映ってました」

「女？」

「それが——」パウジーニは言い淀んだ。

健はぴんときた。そうだ、ひろに本当のことを明かさなければならないのに、サーディクを夕食に招待したりして先送りしてしまったのだった。

「法務部門のウィンディ・サトウ」

ひろが、えっ、と健を見た。「あのひとが！？　なんで！？」

「ウィンディは五年も前から財団内の一部の人間からマークされてたんだ。オレも注意するよう言われてた。ただ、彼女の目的がつかめなかったんだ。

おまえ、ウィンディに絡まれたことを河合に話したろ、河合がオレのところへ云ってきた。

やつも注意喚起されてたから情報を共有するためだ。それでも彼女が何をしたいのか皆目見当もつかなかった。だが、今わかった。おまえを攻撃して動揺させ、ファミリーを分断する。ここへ繋がってたんだ」

「———」

「すまなかった、ひろ、今さらだが、もっと早いうちに、おまえにもあの女の話を話しておくべきだった」

「——あたし——言えなかったのよ——真の父親がほんとに誰かって、からかわれた——なんて——」

悔恨と屈辱にまみれてひろの顔は身も世もなく歪んだ。

健はへたり込んだまま泣き伏すひろを立ち上がらせ、ソファへ戻って隣に座らせた。

パウジーニは居たたまれない思いだったが、ことは急を要する。

「.....ウィンディ・サトウはいつもと違う.....髪型、メイク、服装などですね.....様子だったので、警備の人間も彼女だとは気がつかなかったというのです。ただ、シンくんと手をつないで奥から出てきたので、怪しい人間ではないのだらうと判断して通してしまったと。

しかし.....花束が押しつぶされ引き裂かれているということは、シンくんは抵抗した.....」

295.

そのとき、イリチャが通信してきた。

《.....健.....？　今いい？　なんかお取込み中みたいだけど》

「いや、大丈夫、どうした」

《アルチニアさんの隠れ家は空っぽだよ》

「空っぽ！？」

《えーとね、今朝早くに、牧場の管理棟で爆発事故があったらしいんだ。隠れ家の地上部分だね。白煙が上がって、火が出て、管理棟は全焼。消防車、救急車、それからパトカーがやって来てしばらくは騒然としてたって。今、警察が残って現場検証してる》

「なんだって——」

《ケガ人が何人かいて救急車何台かに分けて病院に運ばれたらしい》

「死者は？」

《それはいないみたいだよ》

（ そうだろ ） と健はこっそり考えた。（ まだ人質を死なせたくはないはずだ ）

《だれがどこの病院へ運ばれたのかまでは、ぼくにはちょっと……》

イリチャ自体、大ケガをしたばかりだし、昨夜は一睡もしていない。少々つらそうだ。

「わかった、それはこっちで調べる。お疲れ。ゆっくり休んでくれ。あ、ちょっと待て、もうひとつ、隠れ家は空っぽだと言ったな」

《ああそれ！ バランケに探ってもらったんだけど、隠れ家自体がないんだ。あったところが空っぽ》

「……今朝方まではあったじゃないか」

《たしかにね。けど、あのアルチニアさんの隠れ家だよ？ 物質的に存在しなくなる方法とか、いくらでもあると思うよ》

witch

296.

芸術部門のワークショップは場所を小劇場に移していた。小規模ながら照明設備、音響設備がひとつおり揃っている本格的な劇場である。

百名を収容できる観客席があり、舞台最前列の緞帳の背後に幾枚も幕が在ってかなりの奥行きがある。照明も音響も防音も完備されているここで、演技者も舞台技術者も様々な実習ができるようになっている。

ワークショップの仕上げをここで行う。しかも、仕上げの発表会は声楽、舞踊、演劇、同時に行うというもので、サーディク先生ならではのであった。

異なるカテゴリーどうし、互いの練習を見学でき、生徒の間に交流も生まれる。生徒たちはみな緊張し、気を高ぶらせ、静かに騒然としているという、奇妙な雰囲気。今しも先生はステージの上で群舞を指導していて自ら踊ってみせ、見学している他カテゴリーの生徒たちの目を輝かせていた。

ひとつおり指導を終えて客席へ降りてきたところに、つ、とYが近寄ってきた。

（マスターに、お客様だそうです）

（私に？）、と思わずボディガードの顔を見る。（誰？）

Yはイヤホンに耳を傾ける。（女性の方で……）

サーディクの胸中にイヤな予感が暗雲となって湧き上がり、思わず身構える。

（リュウモンブチ、と名乗っておられるとか）

（リュウモンブチ！？）

サーディク先生が絶句して逡巡しているところへ、受付係がそのお客を案内してきた。あとで聞いたところによると、たまたまエントランスを通りかかったドストエフスカヤが案内するよう進言したのだという。「なんとなくピンと来たのよ」とドストエフスカヤ

先生は言った。「このひとはメッサナの人間だ、って。それもあたくしの関係者ではなく、芸術関連だ、ってね」

ひとつの建物のなかにこんな設備が広がっているとは思わなかった彼女は、中に通されて面喰い、立ちすくんだ。

すると、背の高い男性が近づいてきて、「どうぞ、こちらへ」と低く言った。
「あなたは……あのときの……」
男性はかるく頭を下げ、彼女をいざなう。あれこれ考えるいとまもなく、ステージから降りて汗を拭いていたサーディク先生はディレクターズチェアの脚に蹴つまづいた。
いきなりといえばいきなりな再会、いきなりな対面だった。言葉が何も出て来ない。それは彼女も同じだったらしい。

「あ、ああああの、間宮宮司さんからこちらを訪ねてみるよういわれまして。いきなり来てしまってごめんなさい。お仕事中ですよ。あの、あたし、で、出直してきます——」
「い、いいいいいや！ 休憩中ですから！ えー、その、ちょっと、びっくりしてしまっ——」

受講中の少年少女たち、その保護者たちが場内にいて、彼らの興味津々の視線を遮るよう、ふたりに背を向けて壁をつくりながら、マスターでも言葉がつかえることがあるのかとYは思った。

297.

年甲斐もなくあたふたしている彼らに内心辟易しながら、Yはふたたびマスターに用事があることを伝えなければならない。

（申し訳ありません、緊急のメールでして）、と携帯電話の画面を見せる。Yはマスターのものすごくむっとした気分を受信したが、傍目にはなんの表情もみせていないあたりはさすがである。

（ええい、うるさいわ、だれだ）と内心ごちながら、先生はメール文面に目をやった。《ウィンディ・サトウを警戒せよ》という。黄色い△の中に黒いびっくりマークの絵文字（複数）つきで、いっしゅん、健はふざけてるのかと思った。

だがその時、女がひとり近づいてきた。両手でぱちぱちと拍手しながら。

「ステキでしたわ～サーディク先生～、先生のダンス、初めて見させていただきました～」

まさにそのウィンディ・サトウ、いつもの地味なウィンディだった。サーディクはゆっくりと携帯電話をYに返す。

「ウィンディ。ここは部外者以外の立ち入りを制限しているのですが」

「あら。あたしは職員ですよ？」

「職員でも、です」

「でもこちらの方は？」とあからさまに不服な顔でユミコを指さす。部外者じゃないの？

「このひとは私のアシスタントです。部外者ではありません。さ、ウィンディ、お引き取りを」

「あらまあひどいわ、あたし先生の大ファンなんです、こんなチャンスは二度とないと思って、有給とってきたんですよ」

「それはどうも。しかしルールはルールですから」

「そんなぁ」となにげに媚びた声をあげながら、ちらりとユミコに視線を向ける。サーディクは嫌な予感がした。そしてウィンディにはもう目を向けない。

「お待ちしましたよ。それで荷物は？」

「..... ホテル・グランプラスに」

「ああ、いいホテルですね、でもせっかくですが、すぐこちらへ移ってください」

「？」

「毎日ここまで通うおつもりですか？ Y、ごいっしょしてホテルを引き払い、荷物をとってくるように」

Yはすかさずユミコの隣に移動し、彼女になにか言わせる隙を与えずに言った。「お供します」

小劇場からユミコを連れ出したYは低姿勢で小声で言った。「強引な事をして申し訳ありませんと、サーディクから伝言です。ちょっと事情がありまして、後程サーディクからお話させていただきます。とにかく、すぐにグランプラスをキャンセルし、こちらの宿泊施設へ移ってください。こちらの方が安全ですから」

「と——おっしゃいますと、私は今、危険だということですか？」

「万が一、ということがあります」

298.

ウィンディ・サトウに関しては、その行動を当面、黙認するようにとの通達がされていた。彼女には不可解な言動が多く、それらが何を意味し、何の目的があるのか、さっぱりわからなかったからである。

彼女は三日間の有給休暇をとってこの日はその初日だった。だから休暇中の彼女がいつもと違う格好で、あるいはいつもと同じ格好で建物を出入りしても誰もあまり不思議に思わなかった。

“ひと仕事” やり終えたウィンディはすっかり気が大きくなっていた。悲鳴をあげる幼児をナイフで脅して縮み上がらせ、財団本部から連れ出して一丁あがり。ちょろいもんだった。もっと時間がかかるかもしれないと三日みてあったが、初日で済んでしまい、拍子抜けしていたところ、いいことを思いついた。

サーディク先生の仕事を覗いてみよう♪

ターゲットのヒヤマ一家はもう死神の手に渡っているし、ヒヤマケンのような年下の男は元気で刺激はあるが妻子持ちは所帯じみて、めんどくさい。そこいくとサーディク先生はナイスなミドルでまったくウィンディのタイプだった。しかも、独身らしいじゃない！ 食指が動かないわけがなかった。

次のターゲットとして狩人ウィンディがロックオンしたところへ、ユミコはやってきてしまったのだった。

小劇場へ潜り込んだまではよかったが、サーディク本人からあっけなく追い出されてしまった。だからといって諦めちゃダメよ、と自分に言い聞かせる。彼の今日の仕事が終わるまでにはまだ時間がある。それまで、暇つぶしが必要だった。

ボディーガードYの車が駐車場から出てくるのを待って、ウィンディはタクシーを使って跡をつけた。わくわくした。あたしってまるで、女探偵みたいじゃない！

大冒険の、始まり始まり～！ 　ってどこ？

尾行は運転手に任せ、化粧道具を取り出して、念入りにメークアップし、派手なウィッグを装着。今朝の“幼児を脅して連れ出す”という一大オペレーションに使ったものだ。バッグに入れっぱなしになっていた。

運転手がルームミラー越しに怪訝な顔をしたがおかまいなしである。

あの“おばさん”をサーディク先生のアシスタントが務まらなくなるくらい、苛めてやらなくてはならない。その考えに夢中になっている。

自分の言葉ひとつで相手がうろうろと狼狽するさまは、ほんとうにおもしろい。ヒヤマ夫人を弄んだ時にそのおもしろさをたっぷりと胆のうしたウィンディである。口先三寸で他人を支配できるという快感に、今は逆に支配されている。

299.

ホテル・グランプラスのフロントで三日間の宿泊の予約をキャンセルしたい旨を告げ、すでにチェックイン済みの部屋へ荷物を取りに行く。

こんなことになるとは思ってもみなかったので、料金は予約した時に手回しよく払ってしまっており、しかも返金不可というプランであったから、もちろん返ってこない。

結構な額の出費にユミコが気落ちしていると、Yが声をかけてきた。「あとで銀行口座を教えてください。支払い済みの料金は財団がもちますので」

「えっ。そんな——」

「規約でそうなっているのです。どうぞご心配なく」

ユミコが荷物をまとめる間、Yは部屋の前の廊下で待機していた。昼間のホテル内は人の動きが少ない。建物内に誰もいないのではないかというくらい、閑散としている。ボディーガードが張り巡らしているレーダーにはとくに変わったものはひっかかって来

ない。

ユミコの旅行用トランクはYが預かる。“この人たち”には間宮神社から竜門湊記念病院まで世話になっているはず。礼のひとつくらい言わなくては、と思うが、あの時醜態を見られていると思うと顔から火が出そうでとても話題にはできなかった。Yもまた素知らぬ顔で黙々とユミコにつき従っている。

彼らは上の階から降りてくるエレベーターの扉が開くのを待って、乗り込んだ。

あとがき

ブリュッセル市内に『グランプラス』とつくホテルはいくつもありまして、どれがいい、ということもないので単に『ホテル・グランプラス』ということにしました。

それと、前回になりますが、『ハーゲンダッツ』ですね、名前のひびきからベルギーあたりの会社かと思ったら全然違った。創業者はアメリカ（に移住したユダヤ）の人で、ハーゲンダッツはこの人の造語なんだとか。また、ハーゲンダッツの工場は世界で3カ国（日本、アメリカ、フランス）にしか無いのだそうです。へええ、ですね。

2026年8月14日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十章 kid nap & extortion- 2

2026 年 8 月 16 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「ぱくたそ」 「Chat GPT」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト ばくたそ
イラスト ChatGPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社